

一度闘争を展開するや、質的深化をとげるのは、彼らが決定的疎外されてきたが故に、当然の事である。闘争は常に、支配・抑圧からではなく、被支配・被抑圧から起るのであり、それが、全人民の社会が形成される日まで、続くであろう。日本においても、東大においても明大においても、階級が存在し、資本の論理が貫徹している限り、常に闘争が起る余地は準備されており、警備隊であり、処分問題であり、カリキュラムの問題であり、講義のりかえを問わず、同一の質を持つのは当然である。本来大学の中心である学問の質いかに問わず、学問の世界における科学論や認識論が、生活空間における科学論、認識論となり得ないと思わされた時、学問の質的深化が形成されるのであり、社会の存在が、学問の対象としてその域を出ないが故に、存在の有効性の立場から攻撃されている。よく言われる様に、結果が腐りであるときは、その結果を導き出した認識が腐りだつたのである。自己の改革を伴い、社会変革へと進んで得る学問として出さなければなり、個別学問反乱は続くであろう。そして、有効な存在は、改革の集約と連帯という意味で全共同運動は進展するし、学問が個別学問にとどまらぬ理由もそこに見られる。戦後形式民主主義の崩壊とも表現し得る。

知的独占組織と教授会の内実

現体制、資本制分業社会にあつて大学の占めている役割はどこにあるのだろうか。現体制を支配している大きな柱として、国家権力と共に、経団連、日経連を中心として君臨する独占資本と、そこに働く労働者に管理者として君臨する所の知的労働者階級が存在するとは明らかである。この知的労働者階級の生産の場が現在の大学に他ならない。そこには、学生を現体制にあつていかに、体質の高度に合った商品、品質検査(卒業試験)を通つた規制品として、送り出す役割を果しているがまさに現在の大学である。その中であつて相互批判、相互不干涉、(相互扶助)をもつて職業としての知的生産物の独占をはかつて来たのが、教授会にはかならない。これはまさしくクラフトユニオンなのである。故に、本来あるべきところとして、大学の自治とはその本質を思考することなく、何もしないことを、離散するために、教授会を閉鎖的なものとし、社会的特権階級として君臨することにより、物質的経済的利益を得て来たのである。斯様に考えることにより、物質的経済的利益に反対し、デモに参加したことも、そして立法機構に守られて白いヘルメットをかぶり、旗竿をつけて学内入り退去命令を出すことも説明出来るのである。湖沼自からの生活の場(物質的経済的利害関係)において自らの利害を守るためにのみ反対したに過ぎない。その後、大学において、少なからずの教授達が体制内改革を唱えていることの内実は、大学の帝國主義的階級を許すことによつて、國家権力から与えられる知的労働者としての特権的独占を公認する以外に何ものでもないのである。

今、学問を研究するのには一番問われているのは何かをとらえ置してある必要がある。われわれも含めて研究し、学生を教育して来たものの内実は何であつたのか、現体制にあつてどういう視点に立つてその本質をとらえなくてはならないのか、「他はよきよきで来た」という人は多い。当然の事が防らなければならぬことを教授士台が証明している。それが出来ないでやつて来た人が多くいることを教授士が証明している。こういう人は例外として、ではその「よきよきで来た」という内実は何なのか、自分の研究そのものを社会の中心で支え置くことが出来ず、狭い視野の中で波動的に、無批判的に進んで来た事は、どういふ結果をもたらしたか。研究活動を例にすれば、多くの人が同一の研究を行なっている中であつて、その中の穴場を見つけて論文をまとめる学会に先がけすることによつて学会での自己の立場を如何に優位にするか、又このことによつて自己の知的独占を如何に保つて行くか的手段に

過ぎない、これが多くの研究者の実態でないのだろうか。その動機を知的好奇心の発露としようとするが、大学における研究はそういうものであつてはならないのだ。主体性をもつた人間として生きる為には、例へば働く人間が如何に肉体的労働から解放されなければならないかというところのみを考えた場合でも果して現状の大学で行なわれている学問・研究がどの様に人民に奉仕しているだろうか。生産面に直結している所で、問題点は非常に多く、解明しなければならぬものであるにも拘らず単に低次元の職能的問題として一般し、何等かえようとはせず、今日の地位を守つて来た。そしてこれからのことを懸念することによつて、自からの延命をはかるようにするのが教授と呼ばれる人達の態度である。であるが故に現在の入試を初め学内で行なわれている矛盾に満ちた諸制度を温存することにより、実践の経験を持たない若い学生を相手にして過去の業績を武器としてヒエラルキーを貫徹しようとしているのである。社会に大学を開放して今まさしく一番急務を必要とされている八達(生産面に直結して働き、そして階級意識をもつていない人達)にこそ大学が応えてやるべきであり、そこに大学の研究者なり教授なりが存在の意義があるのではないのか。これらのことをとらえ置ることが学問である、研究である。今のまゝの体制内であつて研究者自身がいかにか問題意識をもつて研究しようとも、それはこの資本主義社会の一つの重要な要素となつていゝものであり人間を政策・持統する道具とならざるを得ないものである。教育体系にしても現古資本を基礎とした金融資本主義の構造を見合つた「教育」として形成されていることは明らかであり、この様な教育体系は種々な知識と能力をもつた労働者を生産過程へと投入する「労働力商品生産」体系であつて、この様な労働力商品を生産して行く機能を負わされた教育体系はますます物化され非人間化されて行くのである。

教授会という名において何が為されて来たのだろうか。明治大学部教授会規定によれば全十四条からなり、その七条は教授会は左の事項を議決するとして、「教育および研究に関する事項から始つて十二まで、カリキュラム、入学試験等、学生の賞罰等、特選研究生の推薦、教授、助教、助教授、八人事務、……等の広汎に亘つているが、これらの事は日常的にはすべて、工学部においては各科会議(部会議)に附されて、この大務を決め教授会では只単に承認したり、議決するだけの形儀化された事務的な機関になり下つていゝ。従つて多くの教授達は「あんなものはくだらない」と言ひ、従つて「出席しない」と公言する者も居る。これらの補給として教授会へ出ないことを条件に官学の停年退職者を招致してくることもありある。ところが形式はどつしとて整えなくてはならない(即ち五割以上の出席がないと流会になつてしまふ)ので、事実、昭和四二年一〇月一三日付で、高木工学部部長の名をもつて各科科長宛に教授会開催についてという文書を配らなくてはならないことになる。その内容は「一〇月一三日に予定した教授会がある学科の教員全員欠席の為決議会になつた、きりかて残念である。又定期的に集まる人はきりかて少なく一〇月一三日も定刻の五分、五分後にや」と定数は数に達した。これは限定的という主旨である。又事務職員によれば食事が出ないと集まりが悪いとか、……これは何を物語るだろうか。全く教育・研究に無関心であり、やる気のない集団であり、精神構造の腐爛者集団以外の何ものでもない。したがつて前に述べた様に自らの物質的経済的利害が脅かされそうになると、日頃口にしていた真理の探求も、研究の自由も、学問の自由も放り出して(現実には何もやしていない)、又過去に於いても全く遊のことが行なわれて来た。それは工学部部員(昭和四三年四月)において日経連・経団連からの代表者呼んで産業会からの要請をそのまゝ具現化するよう工学部部員を呼んで産業会から十分で

われわれは、この闘争以前まで過去十数回以上に亘つて工学部部長や農学部長、あるいは、各科の教授連と話し合ひをもちて来た。その度毎に「教授会は駄目だ、本筋にしようがない、どうしたらいいか教えて欲しい」と言われ、学部長も「君達のいう事はもっともである。私も大学(工学部)をよくする為に一先懸念するから君達もどんでん

教授会を攻撃してくれ」と云いながら、又われわれが申し入れる前に教授会規定の第六條(教授会は公開しない、ただし必要ある場合は教授会の決議により、当該学部所属の専任教員を出席させることができる)があるのだからこれを適用して参加出来る様にしたいと言いつつも、適用しようとしなかったし、過去一貫してどんな重要な時にでも(例えば学費値上げストの時も、又今回の学園闘争の時も)適用したことはないのである。これは恰も前向きに考えている様な言動を逸しておきながら所詮、そういう事は行わないのが教授会なのである。もう一つの事例を挙げたい。一九六九、六、七に助手連合会議とA班懇談会(工字部の基本方針を討議する)と才以下の専任講師以上の入道、学費値上げスト三大権利と十三項目の要求を認めているので、教授会規定の第三條(教授会専任の専任以上の者から討議すべき事項を示して教授会招集の請求があったときは学部長は十日以内にこれを招集しなければならない)を適用して三大権利の待遇で教授会開催の要求をしたが(A班メンバーは教授会員の1/3以上居る)これもやらなかった。どういふよりもやる気がないのである。学部長はよく「高年令論が悪い」ということを口にするが、老若を問わず大部分が駄目なのである。もし学部長の発言通り、若い教授連が前向きに考えているならば、この六條を一度位適用することがあってもいいが、それは逆にこのA班懇談会が過去何回か会議を重ねて来て何をやってたかというところ、「何もやってない。ただ教授会の開催を派らしたのが成果だ」との事である。今迄述べて来た様に教授、教授会の腐敗堕落は見事なもので、事務職員にすら「工字部の教授会は他のどの学部よりも悪い、あれは無くすべきだ」とまで言われるのである。

自己否定とは

獲得し、金での思想が現実からの挑戦を受け、試験の上で立たされていく。こうした現在の思想の在り方、それを担う人間としての研究者の在り方が問われなければならない。

自分は何の為に生きていくのか、そして何の為に生きていくのか、又、自己が存在する社会とは何か、人間にとって必要不可欠な自己疑問が大学における日常性が否定された時に我々に課せられた事をも問われて来た。私の問題の関心の中心は、あらためてこれら社会と人間を根底的に考へてみる事にある。

人間がまさに誰一人として特権を持たない純粋な人間関係に立つて社会を創造し、かつその様な状況を志向する事を自己に要求する全共闘運動に対して、観念的あるいは理想論として一笑にふし、良い事はあるが不可能であるといひ、自らを日常性や世間という檻に閉じこめ、改主体無自覚の生存者としてただただ現体制への埋没が諸矛盾を拡大させて来ている。それが体制そのものの維持を計って来た存在である。この様な状況の中で再度、人間にとって社会とは何を意味するのか、社会に対する自己のかわりあいの接点は何か、等々自己の主体性の回復という人間解放の要求として捉えなおさなければならぬ。まさにこの点において自己意識をぬき、人々を教育、変革しようとする事は痛烈に否定しなければならぬ。しかし、この変革しようとする自己とは何か、良心の声を真に自分の声なのか、実は自分の良心を道具にするという別の声ではないのか、これは良心の粹のなかだけにいては判断できない。ここに個人の問題から人間関係としての社会における自己の在り方を点検しなければならぬ状況があるのだ。こうした視点において大学における教員の多くは、自分の教え子から「何を問われている」のか解らないし、「自分は立派にやって来た」と云う事によって免罪符を得ようとしていたり、教授会や、組織に責任を転嫁したりして自己を弁解しようとしている。まさにこの様な発想を対応しか出来ない存在自身が問われようとしている中でその無責任性、無自覚性は何に由来するかと考へるのか。

又、多くの職員においては、日常における教育・研究に対する自己の責任をたじろなる上意下達の官僚的対応で学生や教員に接し、多くの学生(卒業生も含む)が事務窓口や事務内容の苦情をもらしている。まして、自分の職を置く大学をどの様に考へようとするのか、構成員の大きな部分を占めながらライオンシムムの神でしか考へ、かつ行動しない姿は大きな疑問とならざるを得ない。そしてこの様な大学状況の中で多くの「ネトライキ」学生は安易なパスポート習得を考へ、あつたかも専門的かつ高等な知的作業が出来ないままに体制の大神の中へ押し出されていく存在として現存している事を確認できる。

こうした大学に私(実験助手)も又、存在していた在り方が問われなければならない。私が大学において知的労働にしろ肉体的労働にしろ、労働を提供した所に経済的のみかえりを得て存在していた。この存在の内実に対しておこなって来た労働とは何か。一方において、教員の末梢の一員として学生の前に登場し、ビロクラットの構成員として大学の社会責務(卒業生労働力を派遣)という汚名をありがたがって行なっていた。

又一方、研究室において研究者としての存在状況も多くは体制に順着し、日常的に改主体的存在形として遂行されていた。

この様な状況に真こうから対決をせよって来た学生による「学園闘争の運動」の中から、我々の目の前に在る、「教員」、「職員」、「学生」という立場や「大学」、「教育・研究」、等々に対する根底的な認識を突きつける状況が提起されて来た。それは自己を対象化し、自分にどうして何を答へればよいか、又、社会(体制)から逆規定されて来ている自己の状況をどの様な視点をもって把握するにかかわって来た。

そこには自己の存在が何を意味し、何を苦痛としていたかの内容を語る事なく、現在と過去、現在と未来への価値基準を設定する事は出来ないであろう。それは簡単に述べれば我々が日常性という状況において意識するしないにかかわらず大学内に存在する矛盾や不正がまさに自分自身が行なってきた。研究や教育そのものであり、よりよく行なおうとする事がその矛盾や不正を更に拡大させ、ひいてはその根幹大学を維持させる役割を担って来た状態を自分の在り方を確認する中から見極められた。ここにおいて、従来の「自己の存在状況」、「大学」、「教育・研究」、「教員・職員・学生」等々はまさに多くの抑圧された人達の不幸のうえに、ある存在として享受されているという事実を指摘する事によって全て批判されかつ否定される立場であると考へる。即ち「加害者であり」、「まさしく犯罪者」としての一翼である事は認めなければならない。それは漠然とした不満、不安をはっきりとした形で自分で定着させる事により、いまや多くの大学人は大学の教育・研究に対する良識の限界を知り、大学が自分自身の欲するものを与えてくれない現実を悟った時、大学の存在はありえない自己そのものの存在もあり得ないことを考へる。

この様な現在の大学状況についての根本的な無知への自覚から出発して来た自己否定の立場にいたすに埋没して、良識の否定思想そのものをやせがまん的に固執したり、安易に従来の在り方を放棄したり、衣替えて教われる問題ではない。大学に内在している、日常性の不合理性や矛盾を論ずる立場は、単なる経済的、制度的関係において考へたとしても捉えきれぬものではなく、自分の内部だけでは処理出来ない様な矛盾を生み出して来ていることを教えてくれている。更に、一切の人間の嫌悪が内包されている現体制において各人が自分をどう考へているかはむしろ第一義的な問題ではなく、自分かどの様な矛盾の中におかれ、その矛盾をどの様に意識しているかが重要となる。だとするならば「弱れる者は筆をもちかむ」という語がある通り、自分の心を支えがすかりなくなり、精神的パニック状態に陥った過程で私自身が自立的であらうとするとき個人にとって唯一の現実である現在の真の意味を失わせる存在を否定する必然性がある。このことが自己否定思想が創造的個人をなすことによって自己既生の最も基本的な出発点である。

ではこの様に必然的に自己の存在を否定しなければならなかった状況の中から私自身が新しい自立した存在をどうとすると、研究業績